

と過ごしたひと夏の思い出や絆は消えることはない。

ほくもこの物語の少年たちと同じように、身近な人の「死」というものに直面したことがない。だから少年たちに感情移入しながら、この物語を読むことができた。人の「死」というものは、心臓や呼吸が止まって、そこで全てが終ってしまいうのではなく、その人が生きてきた証のようなものが、残された周りの人々の心の中に存在し続けていくものなのだと、この本を読んだと感じた。

《中学生の部》優秀賞

自由から生まれる自分

西朝明中学校 二年

川北百華

私は、独特な本の読み方をする。それは、始めの方を少し読んでから、終わりを読む。そして、続きを読むという方法だ。ミステリー小説で言うと、まず、事件が起きる、捜査開始まで読んで、犯人が明かされるところを読んでから、捜査の中盤から最後まで読むといった流れだ。

周りの人たちには、一度も共

そして本との出会いというものも、あの夏の少年たちとおじいさんの出会いに似ているのかもしれないと思った。好奇心を持っていつものせまい世界から飛び出してみたら、自分の知らない世界が待っているのだ。ほんと『夏の庭』の出会いが偶然であつたように、図書館や学校の図書室、あるいは本屋さんで、いつもは立ち寄らない書棚に足をのびしてみるのも、お気に入りの本に出会ういい機会になるのではないかと思う。

まず、小学校の中学年くらいまでは、読書することが好きではなかった。読み始めても、途中で飽きて、読むのをやめてしまっていた。一冊読み終えることは、ほぼなかった。

ある時、読んでいた途中で、またやめようとしていた。だが、結末が気になり、終わりの方だけ読むと、意外な展開だった。そこで、何が起ったのかと思い、読んでいくと、意味が分かり、読書の楽しさや興味を覚えた。それから私は、大抵この読み方だ。

この読み方にしたこと、成長したことが二つあった。一つは、人としての成長だ。苦手なことがたくさんあるが、その一つだった読書を、自分で生み出した方法で、克服することができた。苦手なことには、目をそらしてしまう自分だが、自分の力で、乗り越えることができたことは、私の中ですごいことだと思う。

もう一つは、読むページ数の成長だ。はじめは二百ページでも多すぎて読めなかったけれど、今では、倍以上の六百ページでも、普通に読めるようになった。読めるページが多くなるということは、読める本の幅が広がる。だから、いろいろな知識を得ることができ、自分の世界を広げることができる。

本を読むということは、作者の思いを聞くということ、同時に何か得るものがある。人それぞれ感じ方、考え方が違う。だから、独自の読み方も生まれる。それでいいと思う。

私ははじめ、本は、一ページ

《小学生の部》最優秀賞

本がおしえてくれること

暁小学校 一年

永田めみ

わたしは、あたたかいいろいろのひょうしの本が、だいすきです。そんな本をみつけると、よんでみたくなります。『きみ、なにがすき?』の本も、もりのどうぶつがあたたかくかいてありました。どんなことがかいてあるのだろうと、わくわくしながらよみました。

もりのおくにすんでいるあなぐまは、おにわのくさをぬいて、おともだちのために、おともだちのすきなものをそだててあげようとおもいます。でも、おともだちは、すきなものは、じぶんでそだてていて、あなぐまにたべてもってきません。こまいたあなぐまは、はりねずみに「なに、なにをつくったらいいの

ずつ順番に読むものだ」と勝手に決めつけていた。でも、今は違う。決まってるなんかいない、自由自在なのだ。他にも読み方はある。まだ、出会っていないだけだから、私は、いろいろな読み方を知りたいと思っている。

だろう。」とききます。はりねずみは「そりゃあ、きみのすきなものをなんでも。」とこたえます。はりねずみは、とってもおともだちにやさしいな、とおもいました。あなぐまは、じつくりかんがえます。わたしは、なにをつくるのかな、とドキドキしてページをめくりました。なんと、あなぐまはテーブルとイスをつくったのです。そして、もりのおともだちをしようたいして、にぎやかにすごします。本に、おともだちをしようたいしたいとかいてあったから、あなぐまは、じぶんのすきなことでみんなとなかよくすごせただな、とおもいました。わたしは、あなぐまって、なんてやさ

しいんだろうとかんしんしました。だいすきなおともだちをよろこばせようと、ひつしでいろいろかんがえたからです。

わたしも、ことし、しょうがつこうにゆうがくして、たくさんのおともだちにであいました。おともだちとたのしくすごすには、どうしたらいいのだろうと、いろいろかんがえました。

おともだちのことをおもってしたことでも、あまりよろこんでもらえないことがあります。そんなとき、よろこんでもらうことはむずかしいな、とかなしいきもちになります。でも、はりねずみがいったように、わたし

がしたいことで、おともだちによろこんでもらったらいのだな、とおもいました。そうかんがえると、すこしあかるいきもちになれました。いろいろなかんがえのひとがいます。みんなとなかくするときは、じぶんのしたいことでなかくしていけばいいのだな、とおもいました。あなぐまは、おともだちにぎやかにおしゃべりして、なかよくくらすことが、すきです。

わたしも、おともだちとなかくおしゃべりすることが、いちばんすきです。これからは、おともだちのために、じぶんのすきなことをして、よろこんでもらおうとおもいました。

あたたかいひょうしの本は、

わたしをしあわせなきもちにしてくれるので、だいすきな本です。これからも、たくさん、た

くさん本をよんで、いろいろなことをしり、かんじとていけたらよいな、とおもっています。

《小学生の部》優秀賞

クニマスは生きていた！

桜台小学校 五年

細川 奨 真

秋田県仙北市にある田沢湖は、日本で最も深い湖、水深四百二十三メートルにも及びま

す。かつては、その透明度の高さから「神秘の湖」と呼ばれ、クニマス・イワナ・ウナギ・コイ・サクラマスなど二十種類の魚がすんでいました。周りの山々からは山菜やキノコなどの山の幸がたくさん採れます。自給自足が出来るほど自然の恵みがあり、地元の人々の暮らしを潤してくれていました。

本の中に登場する三浦久兵衛さんはクニマス漁を引き継ぐために、子供の頃から父の姿を見て育って来ました。三浦家は何代も続くクニマス漁師です。クニマスは田沢湖のみに生息していました。大正時代には田沢湖でとれる一匹のクニマスで一升の米が買えるほど高価な物でした。クニマス漁が生活の全てと

いうだけに、田沢湖は漁師にとって命の次に大事な物でもありました。

久兵衛さんが十八歳になる頃に、田沢湖に不運が訪れたのです。これからやとクニマス漁師としてやって行くという時でした。クニマス漁が出来なくなるとは、まさか、今の生活が壊れようとは夢にも思わなかったでしょう。

およそ、今から八十年前の事、水力発電所が建設されました。当時日本は戦車や軍艦、鉄砲や弾丸等を作るために、大量の電気を必要とされました。田沢湖の南に広がる一帯には大きな川がなく長い間、農業用水を確保する事ができませんでした。東北地方は冷害による凶作が続いていたので、田沢湖をダム湖として利用し「毒水」と呼ばれる酸性度の高い玉川温泉の水を引

き込み水量をおぎなうという目的で利用されたのでした。みると水質・水量は落ち、魚は全滅してしまつたのです。

二〇一〇年十二月十五日山梨県の西湖で、絶滅したと言われたクニマスが発見されたと報道されました。田沢湖から五百キロメートルも離れた西湖で生き延びていたのはなぜでしょうか？一九四〇年玉川から田沢湖へ汚染水が導入される数年前に、数十万粒のクニマス卵を長野県、山梨県、富山県、滋賀県へと送っていました。その卵が成長し、山梨県の西湖でクニマスは生きていたのです。残念ながら三浦久兵衛さんはこの四年前に亡くなっており、息子の久

さんが父の気持ちを引き継ぎ活

動されています。

今、秋田県では「クニマスをふるさとの田沢湖へ返す事」を誰もが望んでいます。平成に入ってから、田沢湖の水をきれいにする取り組みが行われていますが、いまだクニマスが生きてる水には戻っていません。いつか湖の水がきれいになって、クニマスが戻る事を僕は願っています。田沢湖には湖のシンボル辰子姫像が湖を見守っているそうです。

私達は自然を大切にして行かなければなりません。私達の未来を守り、つないで行くためだと思っています。二度とクニマスを絶滅の危機にさらしてはならないと思います。

《小学生の部》優秀賞

本との出会いは時代を越えて

『南総里見八犬伝』

川島小学校 五年

瀬古 紅葉

学校の図書室で。家の本だなで。図書館で。本屋さんで。いつでも、本との出会いはいつも私に特別な時間をプレゼントしてくれます。読んだことのない本を手取るのもうれしいし、

大好きなシリーズを何度も読むのもまた、楽しい。お気に入り本は、いろいろあります。困ってしまうほどです。

私は小さい頃から本が大好きでたくさん読んできましたが、

最近、歴史の物語や、古典の作品を読む面白さにはまっています。興味がいって、読めば読むほど、もっといろんなことが知りたくなって、次に読む本を探すのがとても楽しいです。例えば私は百人一首が好きで、今、勉強しているところですが、歌の意味や、それを詠んだ歌人のことを知ると、その歌がもっとよくわかり、イメージが頭の中に浮かびます。歴史上の人物も、その人生について知ると、まるで友達のような気さえしてきます。この夏、特に夢中になって読んだのは、『南総里見八犬伝』というお話です。

『南総里見八犬伝』は、滝沢馬琴という人が江戸時代に書いた、長い長いお話です。今の本だと十冊ぶんぐらいになる超大作を、なんと二十八年もかけて書いたのだそうです。そのままでは言葉もむずかしくて、私にはとても読めそうにありませんが、現代ではこのお話をもとにしたさまざまな読みやすい本が出版されていて、私もこの物語を手にとることができました。

図書館で、何冊かの『南総里見八犬伝』を探して読み比べてみると、文章を書いた人によってストーリーが少しずつ変わっていたり、登場人物のキャラクターや話し方が全然ちがっていてびっくりしました。中には、

主人公の犬塚信乃のお父さんが主役になっているお話まであっておどろきました。

『南総里見八犬伝』は、私がこれまで見たことも聞いたこともないような不思議なお話でした。八房という犬と伏姫がともに銃弾を受けたときののろいによって、飛び散った八つの玉。それを持つのは、ぼたんの花の形のあざを持つ八人の兄弟たちです。離ればなれになったこの八人の剣士を集めるため、長い旅が始まったのです。

現代に住む私たちには全く思いつかないような物語だったので、本当に、昔の人ってすごいなあ、と思いました。そして、

《小学生の部》優秀賞

スプーンおばさんのぼうけん

神前小学校 四年

加藤 紗愛

この話に出てくるスプーンおばさんは、ふつうのおばさんならとまどうことを、「大丈夫」「私ならできるわ」の一言で終わらせちゃうんです。私が思うに、世界一のポジティブおばさんでしょうね。でも、スプーンおばさんはときどきティースプーン

少しづつ集まっていく八人の剣士の大冒険に、ページをめくるたびにドキドキしました。そしてまた、この八人の剣士が、本当にこの国のどこかに、たしかに存在して、泣いたり笑ったりしていたように思えました。

この作品が作られたのは、今から二百年も昔のことだけど、こうして、平成の子どもである私たちが、読んで楽しむことができるなんて、とてもすてきで、幸せなことだなあ、と思います。時代を越えて出会った『南総里見八犬伝』と私。その出会いに感謝して、これからもまた、たくさん本の本を開いてみたいと思っています。

もう一つ特ちょう的なせいがあるんです。それは、心配しうです。例えば、カラスの子がけをしていておばさんの家であつたときには、またけがをするんじゃないかと心配で何日もかえてやれなかつたんです。また、ある日、庭のじゃがいもがなくなっていました。じゃがいもをとったのが、びんぼうな家族だと知ると、ご飯が食べられるか心配で毎日のようにじゃがいもをその家に持って行つたんです。ねっ、心配しうでしよ。

それから、スプーンおばさんが変なせいしかくをしているので、スプーンおばさんの友達のせいとかもこれまた変なんです。ある日、スプーンおばさんの家でパーティーがありまして。すると、北やしきのネッタは花びんをたおしてしまいました。そして、南やしきのシーナはその花びんを床に落としてしまいました。西やしきのビルヘルミナおばさんは、花びんをふんづけてしまいました。東やしきのヨレビーネおばさんは、われた花びんの水とガラスのかけらとテーブルかけに足をつっこんで、テーブルにぶつかりテーブル足を四本とも折ってしまいました。ほら言つたでしよ。変なせいしかくしてゐる。そういえばスプーンおばさん辞書を見

ていると、おもしろい言葉を見つけました。『どじ』これには、私もおどろきました。まあ、よく考えてみるとそれはそうなんですけどね。

例えばこんなこともありまして。ある日、小さくなったスプーンおばさんは、かえるに水泳を習いました。そして、夜にベッドの上で、かえるに教えてもらつた泳ぎを練習していました。すると、まあ、見事にベッドから落ちたんです。でも、みなさん、そりゃベッドから落ちるでしよと思ひますよね。でもちがうんです。スプーンおばさんはなんとも見事で、落ちた時の音があまりにも大きくてとなりの家までひびいたんですよ。だから、ぐっすり、気持ちよくねむっていたご亭主も起こされてしまったんです。

やれやれ。まあ、私的には、スプーンおばさんのことは伝えられたと思ひますけどね。あつ一つ忘れていました、この本のことです。この『スプーンおばさんのぼうけん』という本は、スプーンおばさんのことが書かれています。大切なときに小さくなるスプーンおばさんにはいゝんなピンチが起きます。だから読むときは、そこに注目して読んでみてください。

*** 審査講評 ***

“自分の思い”と“自分の言葉”

国府正昭

書き方に工夫を感じた。

今年の読書エッセイコンクールは応募総数だけで言えば、その数はかなり減少した。とりわけ、従来は最も多かった中学生の応募数が大きく減った。しかし、今回は書き方の初歩的なミスを犯している作がほとんどなく、校内で下選考をして下さったのではと推測できる節もあった。もしそうであるなら、担当の先生のご尽力に深く感謝せねばならない。また意欲的な生徒さんがこのコンクールを知り、自らの意志で書き応募してくれたケースもあるようだ。だから、応募のあった学校数で言えば昨年よりも逆に増えている。小学生と成人の応募数はほぼ昨年並みであったことも考え併せると、現状を私は特に悲観的に捉えてはいない。

さて小学生の部であるが、永田めみさんの作に大変感心したので最優秀賞とした。本のストーリーを適度に紹介しながら、間に自分の感じたこと考えたことを織り込んでいく書き方が素直でありながら論旨明快で、一年生とは思えない素晴らしい作であった。優秀賞の細川奨真さんは、クニマスの全滅という事実の背後にある難しい問題をよく読み取っているように思われた。瀬古紅葉さんは、この夏何種類かの『南総里見八犬伝』を読み比べたという。その探究心が素晴らしい。加藤紗愛さんの作は読み手に語りかけているような

たいと強く感じた。退職を機に、亡き御尊父の蔵書七百冊を読み始めたという谷篤さんの作も胸に迫るものがある。亡き恩師と『武蔵野』の思い出を綴られた谷口訓子さんの作も味わいの深いものが

充実の作品群

中山みどり

小学生の部の最優秀賞に選んだ永田めみさんの「本がおしえてくれること」には驚きましたね。一年生でひらがなばかりの文章でしたが、(あたたかいいろいろのひょうしの本がだいすきです)という書き出しや、(そのような本は、わたしをしあわせなきもちにしてくれらる)という終わりの部分に感激しました。あたたかい表紙のなかからあなぐまがでてきてよかったね。

細川奨真さんの「クニマスは生きていた」はとても充実していました。実はね、田沢湖は私が秋田で中学時代を過ごしたゆかりで同窓会をしたことがあり、風景がよく覚えてきましたが、細川君に初めて歴史的な事柄を学ばせてもらいましたよ。

「本との出会いは時代を越えて」の瀬古紅葉さんも充実した作品でした。
二百年も前の作品を平成の子どもである私たちが読んで楽しむことができるなんて、とてもすてきだ」というあなたに同感です。私の心にも、八犬伝の思い出が残っています。

加藤紗愛さんの「スプーンおぼ

あった。その他にも駕村麻美子さんや生田弘美さん、阿部志げ子さん、奥田かなえさん、伊藤晃代さんなどは入賞と僅差の良い作品であった。

さんのぼうけん」は面白い作品ですね。それをまた、楽しく紹介しているとところがユニークでした。そのほか、久留美諒真さん、諸我朱里さん、藤田萌生さん、高嶋梅葉さんもがんばっていました。

中学生の部では、最優秀賞に岡島唯希さんの「読書は僕の無限の宇宙」を選びました。書き出しの(本をかじることから始まった)という一文に笑ってしまいました。赤ちゃんの頃から十四歳の現在に至るまでの読書の自分史を振り返り、大切なことを発見したようですね。

「私と本」の吉田菜月さんは、真面目に読書に取り組んでいる姿勢に好感を持ちました。本に対するエネルギーに満ち溢れている作品でした。

鶴田絃人さんの「夏の庭」は、(本との出会いというものの、あの夏の少年たちとおじいさんの出会いに似ているかもしれない)と筆者が言っているように、あなたの発見に感動しました。

「自由から生まれる自分」の川北百華さんは、まず本の始めと終わりを読むというユニークな読書

法を語っていましたが、自由自在な読み方の賛美から何かが得られたようですね。

他にがんばっていた惜しまれる人は、サムワース エリッサさん、山路凜さんがいました。

成人の部では、的場大地さんの「祖父の本棚」を最優秀賞に選びました。二十五歳の筆者です。私自身は優等生的作品より読み手に感動を与える作品が好きですが、まさしくこの筆者の作品に感動したのでした。怖かった祖父の亡きあと、本棚の整理を任せられた筆者は、本棚の本を読みながら、祖父の本当の姿を発見し、初めて涙を流すのです。私ももらい泣きました。

「人を育てる読書」の横山晃大さんは高校生です。真摯な取り組み、充実した文章を評価しました。将来を期待させます。

谷篤さんも「私の読書法 亡父が誘った愛読新ジャンル」で父上が遺した七百冊の本に挑戦するのです。この作品も家族の風景が見えてきて、作品が立体化しますね。

谷口訓子さんの「忘れ得ぬK先生 忘れ得ぬ『武蔵野』」とあるように、思い出とつながる読書は素晴らしいことです。

成人の部はベテランぞろいで涙をのんで割愛した方が沢山おられます。

読書に関するエッセー 入賞作品集 二〇一八

平成三十年十二月発行
発行 四日市市教育委員会
編集 四日市市立図書館